
哀しき愛

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しき愛

【Nコード】

N0237BA

【作者名】

usa

【あらすじ】

彼とずっと一緒だと思っていた。

彼の一番近くにいるのは、私だと思っていた。

彼女が現れる前は…。

彼女さえ、いなければ。

彼女さえ、いなくなれば。

お願い、彼を返して…！

パラレルです。

新蘭ですが、一部新志な表現もあります。

暗い志保ちゃんは見たくないという方はback願います。

気持ち

私の名前は宮野志保。

一七歳、高校二年生。

家族はいない。

十年前、私の両親と姉は事故で亡くなった。

それ以来、私は遠縁の阿笠博士に引き取られて暮らしている。

博士は優しい人。

突然現れた私を、何のためらいもなく受け入れてくれた。

時々変な発明とかしたりするけど、私にとっては父のような存在。

でも、どこか違うのを感じていた。

私と博士には、やはり何か壁のようなものがある。

本当の親子ではないんだから、当然といえば当然だけど。

少し、寂しい。

それでも私は、ここが好きだった。

風変わりな老人の家、隣には大きな洋館。

小学校には銀杏並木があり、秋になるとそこをよく通って帰った。

隣にるのは、サッカーボールを蹴っている彼。

リフティングに百回成功したと言って、彼は私に向かって、歯を見せて笑っていた。

私は呆れながらも、笑みを返した。

こういう時間が、何よりも幸せ。

博士というよりも、学校で本を読んでいる時よりも。

私の大切な時間。

大切な彼。

私の…好きな人。

キラキラした笑顔が好き。

少し子供っぽいところが好き。

何もかもお見通しだっていう表情が好き。

彼の全てが、好き。

私と彼、工藤新一は幼馴染。

私が米花町に来たばかりの頃、隣に住んでいる彼は、気さくに私に話しかけてくれた。

最初は別に、なんとも思ってたなかった。

ホームズ、事件、サッカー好きの、ちよつと変わった男の子。

それぐらいにしか思ってたなかった。

私の彼に対する気持ちが変わったのは…そう、中学一年の六月。

帰る頃になって、突然雨が降り出した。

私はその日、傘を持っていなかった。

昇降口で雨がやむのを待っていると、私の前に、青い傘が差し出された。

「ほらよ。これ使えよ」

工藤君はそう言って、私に傘を持たせた。

そのまま一人で走り出した彼を見て、私は別の傘はあるの？と声をかけた。

「バーロ。オレは探偵だぜ？こういうことは想定済みだよ。ちゃんとここに、折り畳みの傘が入ってたんだよ」

バッグを得意気に叩く。

「そう…。なら、借りてくわよ」

「おう。オレ寄るところあっから、じゃあな！」

しばらくして私は気付いた。

彼、昨日折り畳みの傘壊れたって…。

次の日、彼は風邪をひいて学校を休んだ。

呆れる半面、嬉しかった。

自分よりも私のことを思ってくれたことを。

この日から、私は彼に夢中になっていた。

例え幼馴染でも、彼の一番近くにいるのは私。

これから先も、ずっと。

そう思っていた。

気持ち（後書き）

私パラレル好きだな…。

これからよろしく願いいたします＜（（＜

日常

朝、博士が起きる前に私は目覚める。

今まで自炊していたのが嘘みたいに、料理が苦手な博士。

今では家事は、私の担当。

キッチンに立って、朝食の支度を始める。

卵を三個取り出した。

なぜ三個なのかは、今にわかる。

卵を割って目玉焼きを作っていると、チャイムの音が鳴る。

普通だったら、こんな朝から…と思うけど、ここでは至っていつものこと。

私は急いで玄関に向かった。

「おっす」

「朝から元気ね」

寝癖も直さないままに、工藤君はずかずかと上がり込む。

その無防備な様子も、私にとっては愛しい。

「博士は？」

「まだ寝てるわ」

そんなことを言っていると、上の方から物音がした。

博士が欠伸をしながら降りてきた。

あゝあ、あんなにお腹が出ちゃって…。

そろそろ本格的に、カロリー制限させなくちゃね。

「はよ、博士」

「ん？ああ…新一君か。今日は早いの」

「今日はサッカー部、朝練あるんだってよ」

それを聞いて、私は不思議に感じた。

「あなた、部活はやめたんじゃない？」

「そのつもりだけどよ…中道が今度の大会だけでもって言うからさ」

そう言うのと、彼はテーブルに置いてあった紅茶を勝手に飲んだ。

「じゃあねえから、その試合だけ出てやめる」

「きっとその次まで、ってくるわよ」

「断るよ、その時は」

どうかしら、と私は呟いた。

でも、彼には部活をやめてほしくなかった。

サッカーをやっている時の彼は、すごく楽しそうだから。

「はい、できたわよ」

「サンキュー」

目玉焼きとソーセージ、トーストを二人の前に置く。

練習があるからか、工藤君はがつついて食べていた。

「もう少し落ち着きなさいよ」

「そうじゃぞ。せっかく志保君が作ってくれたご飯を…」

だけど、彼はさっさと食べ終わって、紅茶でトーストを胃に流し込んでいた。

「わあってるよ。んじゃな。先行くぜ、宮野」

「はいはい」

あの髪で行く気かしら…。

多少の不安は残るけど、私は手を振って見送った。

至って普通の朝。

こんな普通の毎日が続いていくに違いない。

彼と博士にご飯を作って、彼を見送って、自分も学校に行って…。

一緒に帰って、買い物に付き合ってもらったり、少し寄り道をした
り。

またご飯を作って、興味もない事件の話を聞かされて。

そんな日が続いていくと思っていた。

彼女が現れるまでは。

転校生

工藤君が出ていった後、私は一人で学校に向かう。

正直に言って、私には友達と呼べる人は少ない。

この性格だし…ね。

教室のドアを開けると、一瞬だけ視線が集まる。

私だとわかると、皆おしゃべりを再開させる。

私は自席に向かうと、バッグを置いて、隣に向かっておはようと言った。

「おはよ、宮野さん」

鈴木さんは笑うと、また他の子と話しはじめる。

鈴木園子さんは、わたしと話してくれる、数少ないクラスメイトの一人。

大体の女子は、私が工藤君と仲が良いからと、勝手に憎んでいる。

私に対する陰口が少なくないことも知っている。

まあ、言いたい人は言っていれば良いわ。

「ねえねえ聞いた？今日は転校生が来るらしいよ。しかも女子の！」

他の女子が話しているのが聞こえてきた。

「へーえ、どんな子だろ」

「さあ。美人かな？」

「優しい子だといいね」

興味はないわ。

私は本を取り出すと、しおりが挟んであるページを開いた。

しばらくすると、ドアが開いて、サッカー部の部員が入ってきた。

私はチラッとそちらを見て、工藤君の姿を確認した。

「おい、何盛り上がってんだよ？」

中道君が女子の話題に割り込んでいる。

「今日、転校生が来るんだってさ」

「何？女か？」

「そうだって」

すると、相沢君まで面白がって加わった。

「美人か？」

「知らない」

「可愛い子だったらアタックしてみるか」

「無理無理！」

クラス中がワツと笑いに包まれた。

やがてチャイムが鳴って、担任が後ろに、別の学校の制服を着た女子を連れて入ってきた。

男子がざわめいたのがわかる。

「毛利蘭といいます。よろしくお願いします」

毛利さんは大きな目を皿のようにして笑った。

長い黒髪がふわっとなびいた。

美人

この一言がぴったりな人だった。

でも嫌みがない。

優しい顔をしていて、女子もすぐに好感の目になった。

でも…彼は違うわよね。

私はそっと、斜め後ろの席の工藤君を盗み見た。

だけど、なぜかしら。

工藤君が一番、彼女を真剣な目で見ている気がする。

気のせい…よね。

だけど、私の考えは違っていた。

毛利さんは工藤君の隣の席。

つまり、私の後ろ…。

彼女は、席に座る直前に、小さな声で言った。

「久しぶりだね。新一…」

彼女

久しぶり？

新一？

私の頭の中に、その言葉ばかりがぐるぐると回る。

二人は、知り合い？

だけど、私がたずねる前にホームルームは終わり、クラスは元の騒がしさを取り戻した。

女子がわっと毛利さんの周りに集まる。

「よろしくね、蘭ちゃん！」

「部活は？何かやってた？」

「彼氏とかいる？」

「私たちとも仲良くしてね」

毛利さんはポカンとしつつも、笑顔を絶やさなかった。

「ありがとう」

そう言って微笑む彼女は、天使のようだった。

「あ、一時間目って体育だっけ？」

「やっぱ。着替えなきゃ！」

「更衣室行こー」

「あたしらトイレで着替えるー」

時計を見ながら、女子が動き出した。

そういえば、私も制服のまま…。

私も席から立つと、ジャージを手にとった。

二人一組

この台詞が教員から出てくると、無性にため息をつきたくなる。

私にはペアになってくれる人がいない。

皆さっさと決めていくし、わたしと仲良くしようとする人もいない

から。

私が一人でやっている、教員は必ず怒る。

それを影でクスクス笑っている人もいた。

でも、今日は違った。

私がいつも通り、バレーボールを持って一人で端の方へ行こうとすると、後ろから声をかけられた。

「あの、一緒にいい？」

毛利さんは遠慮がちに言うと、上目使いに私を見た。

どうやらいくら一瞬で気に入られたとはいえ、その日からグループに混ぜてもらえたわけではないらしい。

「いいけど」

「ほんとに？ 良かったあ」

彼女の華のような笑顔に、私もつられるように笑った。

「それじゃ、えっと…」

「志保よ。宮野志保」

名前を教えると、彼女はなぜか私の手を握った。

「よろしくね、志保さん！」

「え、ええ…」

周りから冷たい視線を感じた。

私が彼女と仲良くなるのが気に入らないらしく、女子が数人こちらを見ていた。

毛利さんは気付いていないのか、無邪気に私の手を引いて歩き出した。

「志保さんは、こっちに来てからの私の友達一号ね」

バレエのレシーブ練習の合間、彼女は言った。

「こっちにはあんまり知り合いがなくて…色々教えてね」

それを聞いて、私はさっきの工藤君と彼女の会話を思い出した。

「あなた、工藤君と会ったことあるの？」

少し間を開けてから、彼女は頷いた。

「まあね。幼馴染なんだ。といっても、十年前の話だけど」

「幼馴染…？」

私は聞き返した。

「うん、そう。新一もね、十年前は私と同じ町に住んでいたの。家が近くて、両親も仲が良かったから、よく一緒に遊んでたんだ」

十年前といえば、私と彼が初めて会った頃。

その少し前に、彼はこっちに越してきたとは聞いていたけど…。

「アイツ、まだホームズの話とかしてる？ 迷惑でしょ。あのホームズオタク」

「そ、そう…」

「今はなんか、有名になってきてるみたいだけど、そのうち絶対変な事件に巻き込まれちゃうんだから。ねえ？」

その後も続く、彼の愚痴。

でもそれが、自分への嫌味に聞こえてくる。

まるで、私は彼のことを、こんなに知っているの、とでも言うような…。

いや、聞きたくない。

彼女といたくない…！

そこで、ホイッスルの音が鳴った。

「はい、一旦集合！」

教員の号令で、私はホッとして彼女から離れた。

彼に一番近いのは私と思っていた。

でも違う。

彼に一番近いのは、彼女なのかもしれない…。

夕ご飯

家に帰ると、私は一人で夕食の支度を始めた。

でも、頭に浮かぶのは彼女。

天使のように優しげな笑顔で、誰からも好かれていて…。

敵わない。

敵いっこない。

あんなに素敵な人が、もしも彼を好きなら…。

私には到底、歯がたたない。

ため息をついていると、後ろから博士が来た。

「どうした、志保君」

博士はいつものように、優しく聞いてきてくれた。

「何でもないわ。夕飯、もうすぐできるから…」

私はそう言うと、包丁で野菜を切りはじめた。

「そうか…。そういえば、そろそろ新一君も来る時間じゃろ。腹を空かしておるぞ」

博士が時計を見ながら言った。

今日も彼は、きつとこの家で夕食を食べるはず。

そうだ。

例えば彼女と工藤君が幼馴染でも、私も彼の幼馴染の一人。

そして今、彼と一番時を過ごしているのは私…。

そう考えると、私は肩の力がすっと抜けた。

「そうね、博士…」

私は博士に返事をする、先程よりも軽快なリズムで包丁を動かした。

今日はカレーを作っている。

練習で空腹の彼のために、いつもよりも多めに。

早く来ないかしら…。

そこへ、私の携帯が鳴った。

表示されていた名前を見て、私は急いで通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「ああ、宮野。もう飯、作っちゃったか？」

電話の向こうから聞こえてくるのは、工藤君の声。

「ええ。どうかしたの？」

私がたずねると、彼は少し気まずそうに言った。

「わりい。オレ、今日はパス」

「え？」

「友だちとこれから食いに行こうと…。あ、明日、お前の飯は食うからさ」

彼の必死な様子が目に浮かぶ。

「別にいいわ。気をつけてね」

「おう！」

そう言うのと、彼はあっさり電話を切った。

少し寂しいけど…仕方ない。

「新一君は来ないのか？」

「ええ、みたいよ」

「そうか。せっかくの夕飯が…」

博士が残念そうに眉をハの字にさせた。

「しょうがないわ。私達だけで食べましょう」

「そうじゃな…。わしもたっぷり食うぞ」

「博士はサラダ」

「え…?」

寂しさを堪えて、私はカレー作りに戻った。

でも、さっきよりもやる気が出ない。

私も意外と、現金な人だったのね…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237ba/>

哀しき愛

2012年1月4日13時50分発行